

ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクション  
25周年記念Ⅰ 夏の企画展

# HAMAGUCHI YOZO



浜口陽三 《14のさくらんぼ》 1966年 カラーメゾチント 52.3×24.4cm  
Fourteen Cherries Color Mezzotint



波多野華涯 《蘭竹図》 六曲一双屏風(部分) 大正13年/1924年

# HATANO KAGAI

2024

6/11 火

8/18 日



Musée  
Hamaguchi  
Yozo:  
Yamasa  
Collection

2024 Summer Exhibition  
11 June (tue.) – 18 August (sun.)

Musée Hamaguchi Yozo:  
Yamasa Collection

1-35-7 Kakigaracho, Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo, Japan 103-0014  
Closed: Mondays (or Tuesdays when national holidays fall on a Monday)

<https://www.yamasa.com/musee/>

波多野華涯 について

波多野華涯(1863-1944)は、大阪に生まれ、東京に出て跡見花蹊や瀧和亭、のちに地元で森琴石に学んだ後、1917年に岡山に住まいを定め、南画家として生き抜いた女性です。浜口陽三の父、第十代濱口儀兵衛の後半生の南画の師でもありました。構図やモチーフのとりあわせ、配色など、華涯は南画の伝統を守りつつも、新鮮な感性を盛り込み、当世の南画とも言える力強い作品を残しました。昨年は実践女子大学香雪記念資料館にて展覧会が開かれ、この夏には岡山県立美術館で本格的な回顧展が予定されています。

E  
V  
E  
N  
T  
S  
開  
連  
イ  
ベ  
ン  
ト

◆ **ギャラリートーク**

宮崎 法子(実践女子大学文学部美学美術史学科名誉教授)  
6月29日(土) 14:00~ 入館料のみ 時間にお集まりください。

◆ **ワークショップ 初心者のための水墨画教室**

墨で竹を描きます。講師:水墨画家 鵬水  
6月22日(土) 17:10~18:40  
定員7名 入館料+1500円(道具、材料費)  
持ち物は特にありません。汚れても良い服でお越しください。  
申込み受付 6月12日(水) 12:00~電話にて先着順

この屏風は美術館では初公開、東京では初めてのお披露目です。  
知られざる女性南画家の迫力ある屏風と、  
奥深い浜口陽三の銅版画の取りあわせをぜひご覧ください。

展覧会概要

休館日 | 月曜日(ただし7/15、8/12は開館)、7/16(火)、8/13(火)

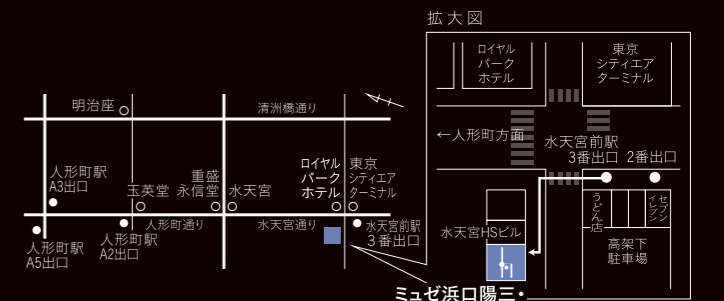
入館料 | 大人600円 / 大学・高校生400円 / 中学生以下無料

開館時間 | 11:00~17:00(土日祝は10:00~)、最終入館16:30

🌙 ナイトミュージアム…会期中の第1・3金曜日\*は20:00まで開館、  
最終入館19:30(\*6/21、7/5、7/19、8/2、8/16)



会場 **ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクション**  
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-7 Tel 03-3665-0251



アクセス  
東京メトロ半蔵門線[水天宮前]3番出口そば  
東京メトロ日比谷線[人形町]A2出口徒歩8分  
都営浅草線[人形町]A5出口徒歩10分



Access

# 浜口陽三と波多野華涯 — 匂い立つ黒と黒 —

H  
A  
T  
A  
N  
O  
K  
A  
G  
A  
I



静かな闇に浮かぶさくらんぼ。

浜口陽三(1909-2000)の銅版画は、光を含んだ闇のグラデーションが印象的です。

本展ではその銅版画と共に、陽三の父と交流のあった南画家・波多野華涯(1863-1944)の「蘭竹図銀屏風」を展示します。

ごあいさつ

世界的銅版画家浜口陽三氏の美術館創設25周年を記念して、この度、浜口陽三氏の作品と、私の曾祖母波多野華涯の南画作品「蘭竹図六曲一双銀屏風」を取合せる企画が実現致しました。実はこの屏風は、昨年5月、G7広島サミットの宮島会合において、各国首脳達の背後に飾られたものです。今年は奇しくもこの屏風が描かれてから100年目の年にあたります。

この度、所蔵者岩惣旅館の御協力をいただき、初めて東京にやっております。

浜口陽三氏の銅版画との出会いが、新たな世界を生み出すかもしれません。

一期一会のこの機会に、より多くの皆様に御清鑑いただけますよう祈念致しております。

華涯文庫代表 小田切マリ



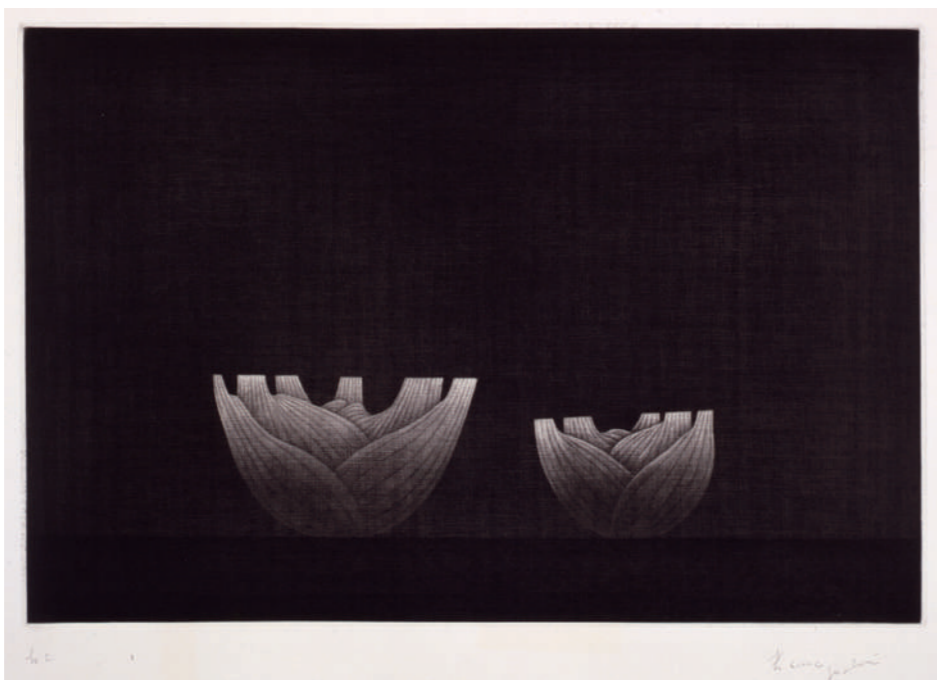
波多野華涯 《蘭竹図》 六曲一双屏風 大正13年/1924年 紙本銀地墨画 各168.0×374.4cm  
みやじまの宮 岩惣 所蔵 左:右隻 蘭図 右:左隻 竹図

清流と切り立つ岩に竹と春蘭をあしらった銀屏風は、黒の濃淡によって、立ち上る霧や蘭の芳香まで表現され、臨場感をもって迫ってきます。

浜口作品における墨絵の影響は、これまで幾度となく評論家に指摘されてきました。

今回は画風を超えたさらなる繋がりを求めて、永遠の時空で響き合う二人の画家の作品、とりわけ黒の諧調をご覧ください。

H  
A  
M  
A  
G  
U  
C  
H  
I  
Y  
O  
Z  
O



浜口陽三 《ういきょう》 1958年 メゾチント 29.3×44.0cm Fennel Mezzotint



浜口陽三 《パトリックのさくらんぼ》  
1980年 カラーメゾチント 7.6×7.6cm  
Patrick's Cherry Color Mezzotint



浜口陽三 《西瓜》 1981年 カラーメゾチント 23.3×54.1cm Watermelon Color Mezzotint

## 浜口陽三と南画

浜口陽三は、40歳を過ぎてから本格的に銅版画に取り組み、独自の作風を大成させました。東京芸術大学を中退し、銅版画家に至るまで、陽三は自分なりの芸術を探索しつづけ、油彩、水彩、彫塑など、様々な制作を手がけています。陽三が試みたのは、西洋の芸術だけではなく、浜口陽三の父、第十代濱口儀兵衛は、南画の収集家として知られ、自身も小室翠雲について南画を描きました。南画は、当時の名士たちの多くが身につけた共通の教養であり趣味でした。浜口陽三も南画に親しんで育ち、画業の転機に際した30代の一時期には墨絵を習いました。